



274号
2022/6

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



羊の解体：夕食用に羊を解体する。草地の上での作業は手際よく、血もこぼさずに綺麗に解体した。内臓や血は瑠璃の洗面器に切れ分けて入れる。夕餉に出たときの味付けは塩味だった。

(内モンゴル西ウジムチン旗にて 2008年6月 撮影：佐々木健之)

'わんりい' 2022年6月号の目次は18ページにあります

今月の言葉は、日本語の成語辞典では見つけれませんでした。努力を怠り、日々無為に過ごすことへの戒めの言葉ですが、日本語で、この四字だけで表すのは無理なようです。因みに、手許の子供向け中国語絵本でも、3冊のうち2冊にしか載っていません。

・>・>・>・>・>・>・>

昔、五台山の森の中に、寒号鳥と呼ばれる鳥が住んでいました。羽の美しいのが自慢で、夏の間中、森の中を飛び回って、「私は美しい！見て！見て！世の中で一番美しい鳥よ！」と歌い続けていました。

秋になって、他の鳥たちが越冬地へ移動したり、冬ごもりのための快適な巣を築いたりし始めても、この寒号鳥は何もせず、一日中自慢の羽を見せびらかしながら歌い続けて、夜は木の枝の付け根で眠り、冬ごもりのための巣を作ることなど考えもしませんでした。

冬になって、寒さが厳しくなると、美しかった羽は色褪せ、抜けて飛べなくなっていました。巣を用意しなかったため寒さを防ぐ術もなく、直ぐに死んでしまいました。

・>・>・>・>・>・>・>

言葉の意味：成り行き任せに暮らし、無為に日々を過ごす。その日暮らして、先のことは考えず、何の努力もしないこと。

使用例：彼はいつもいい加減な気持ちで授業を受けていて、教室では居眠りをするか、授業そっこのけでクラスメイトとおしゃべりをするかのどちらかだ。

・>・>・>・>・>・>・>

日本語としては、「場当たりの対応をする」と

か「無計画に暮らす」と言った意味ですが、この四字成語から派生した言葉は見当たりません。

それにしても、この話はイソップの「アリとキリギリス」のお話とそっくりです。以前「火中取栗」をご紹介した時、その出典がイソップだと分かり驚きましたが、今回は、このお話の出典が、元末明初に生きた学者、陶宋儀とうそうぎ（字は南村）という人が著した「輟耕録てつこうろく」に出てくるお話だと知って、反対の意味で驚きました。もっとも、元末明初とい

う時代を考えれば、「イソップ物語」からの翻案ということは十分考えられます。

ここに出てくる「寒号鳥」は原典では「寒号虫」となっていて、

「足が4本あり、翼には肉がついていてあまりうまく飛べない想像上の鳥」と説明しているようです。足が4本もある鳥とは、想像できませんね。「寒号虫」を辞書で引くと「鼯鼠（モモンガ・ムササビ）のこと」とあります。

ムササビなら足は4本ですし、

皮膜も持っているもので、それらしく見えますが、鳥ではないし、美しさをアピールして飛び回るとか、実際と話の内容とは符合しません。ここでは深く詮索しないでおきましょう。あくまでの空想の動物です

五台山は、ご承知の通り、山西省忻州市五台县きんしゅうにある山で、峨眉山、普陀山、九華山と並んで、中国仏教四大名山と称されています。それぞれ峨眉山は普賢菩薩、普陀山は観音菩薩、九華山は地藏菩薩、五台山は文殊菩薩の霊場として知られ、各地とも信者で賑わいますが、特に五台山は中国国内で唯一、中国仏教とチベット仏教共通の聖地と目され、広く中国全土から信者の篤い信仰を集めています。



挿絵：満柏画伯

散曲〔天浄沙〕秋思

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

散曲は元王朝の時代に大流行した元曲の中の一ジャンルです。元曲は雑劇と散曲の二つに分かれます。雑劇とは歌劇の一種で、今の京劇の先祖に当ります。歌とセリフと仕種に分かれ、歌の部分は歌舞伎で言えば長唄や浄瑠璃のようなもので、物語性に富んでいます。

これに対して散曲の方は歌唱の部分が独立したもので、日本で言えば地唄や端唄の類に似ています。短いものは〈小令〉と呼ばれ、小唄に似ています。〈小令〉にはユーモアに富んだ戯れ歌風のものから抒情性に富んだ短歌風のものまで幅広く含まれます。この点は〈詞〉と共通するものがあります。後に歌詞の部分が楽曲から離れ、古典詩歌の一ジャンルとして独立していく点も〈詞〉に似ています。〈詞〉と合わせて〈詞曲〉と呼ばれることもあります。また、これに詩を加えて〈詩詞曲〉と言えば中国古典詩歌全般を指します。

今回は馬致遠の〔天浄沙〕『秋思』を取り上げます。馬致遠は元代を代表する雑劇作家の一人です。漢代の悲劇のヒロイン王昭君を主題にした雑劇『漢宮秋』は特に有名です。天浄沙というのは楽曲の名称であって、作品の内容とは関係ありません。『秋思』というのがこの作品の題名です。

tiān jìng shā qiū sī
〔天浄沙〕秋思

mǎ zhì yuǎn
馬致遠

kū téng lǎo shù hūn yā
枯藤老樹昏鴉
xiǎo qiáo liú shuǐ rén jiā
小橋流水人家
gǔ dào xī fēng shòu mǎ
古道西風瘦馬
xī yáng xī xià
夕陽西下
duàn cháng rén zài tiān yá
斷腸人在天涯

- * 枯藤 = 枯れた藤蔓。
- * 老樹 = 古木。
- * 昏鴉 = 日暮れのカラス。
- * 小橋 = 小さな橋。
- * 古道 = 古い街道。
- * 西風 = 秋の風。
- * 瘦馬 = 痩せた馬。
- * 西下 = (夕日が)西に沈む。
- * 斷腸人 = 斷腸の思いを抱く人。
- * 天涯 = 遠隔の地。旅の空。

〔訓読〕

ことう ろうじゅ こん が
枯藤、老樹、昏鴉あり
しょうきょう りゅうすい じん か
小橋、流水、人家あり
ことう せいふう そうば
古道、西風、瘦馬あり
せきやうにし お
夕陽西に下りて
だんちやう てんがい
斷腸の人、天涯に在り

「枯藤、老樹、昏鴉……」。前半の3句に名詞が並び、「夕陽西に下り……」と続くあたり、枯淡の雰囲気の中に、そこはかとなく寂寥感が漂い、文人画の世界を彷彿とさせます。

そして末尾の一句「斷腸の人、天涯に在り」で、孤独な旅人の姿が映し出され、作者の奥深い内面が暗示されます。

〔和訳〕

ふじづる からす
藤蔓の絡む古木に、夕べの鴉
こばし
小橋のたもと、せせらぐ水辺、人家あり
秋風の、路上に痩せたる馬ありて
ひ
陽は沈みゆく
だんちやう
人は斷腸、天涯の旅

馬致遠は若い頃、青雲の志を抱いて官途に就きます。しかし異民族支配のもとでは出世もかなわず、地方職を転々とした後、大都（元王朝の都、今の北京）に帰り、劇作家の道に進んだと伝えられています。

李白の七言絶句『^{つと}早に白帝城を発す』

報告:寺西俊英

今回は李白(701年~762年)の『早发白帝城』です。植田先生の漢詩の会は、かれこれ10年余りになりますが実は漢詩に多少でも関心のある人なら知らない人はいない李白のこの詩は、本会で初めて取り上げられました。

植田先生によりますと、「この詩は本会で紹介するのを敢えて避けてきました。内容が史実に密接に関わり合っている杜甫の場合と異なり、李白の詩には多くの場合時代背景が入っておらず、いつ頃詠んだか分からない詩が多いのです。しかし解釈する人は往々にして、詩に取り上げられた内容とその時の作者の心境を推し測るため、成立背景を特定しがります。そうすることによって解釈の幅が狭められ、意味が固定しやすくなるからです。しかし一方、成立背景をどう推定するかによってその意味も大きく違ってきます。李白の『早发白帝城』は語句の解釈という点ではさほど難しくありませんが、成立背景をどう推定するかによって、作品の受け止め方も全く異なってきます。こういう問題に深入りするのを避けるため、これまで取り上げませんでした」と言うことでした。ここにこの詩に対する接し方と言うか、ヒントがあるようです。

本詩の成立に関しては二つの説があります。

- ①. 58歳の時の作。安史の乱の際、李白は玄宗皇帝の第16子、永王李璘の幕僚となっていたため、永王の謀反のあと、罪を得て758年に夜郎(今の貴州省西部、その昔夜郎という小国があったが、漢の武帝によって滅ぼされ、後世、流刑の地となっていた)に流されることになった。長江を遡って白帝城まで来たとき幸運にも途中で赦免され帰途についた。その時の解放感を詠ったものとする説。
- ②. 25歳の時の作。後世に詩仙と称されるようになる李白は、5歳の時両親と共に蜀(四川省)に移り住み、仙人に憧れたり剣客に交わったり、自由奔放な青少年期をすごしたのち、25歳の時、志を天下に求め、初めて蜀を後にして長江を下った、その時の作とする説。この場合、詩作のモチーフにな

ったものといえば、将来への期待感と好奇心です。同時に、故郷への未練も作者の心のどこかに残っていたかもしれません。

旧来の説としては②の方が一般的でした。故郷を後にした李白が初めて三峡を下った時の心境を伝えたものという説です。日本では専らこの説を踏襲してきました。しかし中国ではこの旧説に異を唱える人が現われ、①の説が登場してきたわけです。今の中国ではこの新説が定説化し、旧説はどこかに追いやられた感があります。日本でも近年この新説に同調する傾向が強くなっているようです。

細かい点は後でまた触れるとして、まずは作品の内容を見て行きましょう。

zǎo fā bái dì chéng
早发白帝城

zhāo cí bái dì cǎi yún jiān
朝辞白帝彩云间
qiān lǐ jiāng líng yī rì huán
千里江陵一日还
liǎng àn yuán shēng tí bú zhù
两岸猿声啼不住
qīng zhōu yǐ guò wàn chóng shān
轻舟已过万重山

^{つと}早に白帝城を発す

あした はくてい じ さいうん かん
朝に白帝を辞す彩雲の間
ちさと こうりょうついち かえ
千里の江陵一日にして還る
りょうがん えんせい な や
两岸の猿声啼いて住まざるに
けいしゅうすで す ばんちよう
軽舟已に過ぐ万重の山

この詩を全員で朗読した後、植田先生は、「訓読しても現代中国音で朗読しても実に気持ちの良い詩ですね。このように爽快でスピード感のある詩は、漢詩では珍しいです。また「两岸の猿声」という聴覚表現と「万重の山」という視覚表現が絡み合って絶妙な臨場感を醸し出しています。動画っぽい詩とも言えるでしょう。李白の頭の中には、このころ既に動画のような映像世界があったのではないかとさえ思わせま

す」と解説され、皆さん納得です。

詩の意味は次の通りです。

一句目(起句)

李白を乗せた小舟は早朝、朝焼け雲に彩られた景色の中を急流に乗って下っていく。「白帝城」は、漢末に公孫述が築いた砦。三国時代蜀の皇帝劉備玄德が呉との戦いに敗れて病没したところとして知られる。

二句目(承句)

千里の彼方にある江陵に向かってわずか一日で還っていく。江陵は、湖北省江陵県。長江の中流域の港灣都市荊州のこと。一日とあるが、実際には2～3日かかるらしい。

三句目(転句)

兩岸に人影はなく、寂しげに響く野猿の声が啼きやまない。かつて三峡には野生の猿が多く棲んでいた。この地の猿の声は寂しげに響くので、寂寥感、悲愴感を表すことが多い。「啼不住」は、啼きやまない。

四句目(結句)

小舟は幾重にも重なる山々の間を猛スピードで通過し、さらに下流へと突き進む。

ここで問題となるのは「还(還)」の一字です。李白が三峡を下ったのは生涯のうちで二度しかありません。最初は②の説にあるように、初めて故郷を離れて東に向かった時です。だとすればここで返るという意味を表わす「还」の文字を用いるのは不自然ではないか。①の説では、流刑地に向かっていた李白が白帝城で赦免の詔を賜って下流へと引き返すわけだから、こちらの方が理にかなっている、というわけです。しかし植田先生は次のように続けます。「これは李白を主体に考えた場合にそうなるのであって、舟を主人公とした場合は必ずしもそうはならない。舟は下るばかりではなく上る時もありますね。上る時はどうやって上るのでしょうか。手漕ぎに頼ったり、岸辺から大勢で綱を引きあったり、大変な時間と労力を費やし上っていきます。恐らく数か月を要したことでしょう。それが下流の荊州に返る時には一日やそこらで返りつくわけですから、②の場合にだって「还」の字を使うことは必ずしも不自然とは言えま

せんね。だから②の説を排除する論拠にはならないわけですよ」と。

植田先生は、またこのように説明されました。「この詩は、李白が目にした光景と体験した実感をそのまま即興的に自分の言葉で表現したかのように見えますが、必ずしもそうではありません。この詩には次のような典故の裏付けがあります。李白の一時代前、酈道元という学者の著した地理書『水経注』に「朝に白帝を発し、暮に江陵に到る。その間一千二百里、奔に乗り、風を御すと雖も、以て疾しとなさざるなり」という記述が見えます。また同書には当地の漁歌を引用して「巴東の三峡、巫峡長し。猿鳴三声、涙裳を沾す」とあります。幼い頃から道教関係の書物を読み漁っていた李白の頭の中には、これらの記録が当然焼き付いていたと思われれます。普段は忘れていた記憶が三峡の景観を目にしてふと蘇ったのかも知れません。いずれにしろ白帝城から江陵まで千里(約500キロ)の行程を三峡の急流に乗れば一日で到達することもあり得るということを李白は予め文献を通じて知っていました。また三峡は野猿の生息地であること。そしてその野猿の鳴き声が、聞く者の悲愴感をそそるということも知っていたのです。このように考えると、李白が野猿の声を実際に聴いたかどうか、李白を乗せた船が果たして一日で江陵に着いたかどうか。甚だ怪しいものです。というか、そういうことはどうでもよかったのかもしれないね」と。

さらに「李白はいわゆるパクリの天才とも言えますね。詩作の際の主要なテクニックの一つとして、典故の活用があります。古典に対する読者と作者の共通認識の上に立って作品のイメージを膨らませ、読者を作品世界に引き込んでいく手法ですが、知識をひけらかすだけのわざとらしい典故の羅列は却って嫌われます。ところが李白のそれは原典の存在そのものを呑み込んでしまいかねないほどの迫力があります。この迫力こそが創造力というものなのでしょう。こんなことを考え合わせながら、どちらの説が納得できるか、心に問いかけてみるのも一興です」とも。

先生の名解説に納得した一日でした。

明末から清初にかけて活躍した、呉三桂（1612年～1678年）という人物をご存知の方は多いと思うがどのような経歴の人物だったのかまず見てみたい。

呉家はもともと江蘇省の出自であったが、彼の父は武官で遼東に居住し籍も遼東に移した。従って三桂は1612年に遼東で生を受けた。父の功績により明の武将に取り立てられて出世し、1641年には提督として遼西の寧遠州城（現在の遼寧省・興城市）で明軍を指揮し北東からの清軍の防備に当たった。

1644年、農民反乱指導者の李自成率いる順軍（明朝を倒した李自成が建国した王朝の名）は李自成の乱と呼ばれる反乱を起こして明朝の首都・北京を陥落させた。北京の朝廷はこの時順軍が北京に迫る、との報を受けて呉三桂を北京の防衛に当たらせようとした。しかし山海関を通り北京への途中、北京陥落の報を受け三桂は山海関に引き返したのだ。一時は順軍への投降を決めていたが、翻意して清

のドルゴンに山海関を明け渡しドルゴンと一緒に行動したのである。呉三桂と清軍は激戦の末李自成を破りそのまま北京に入城し、この年新王朝が成立した。清朝は平定に功績のあった呉三桂など明の三將軍を藩王として雲南、広東、福建に封じた。三桂は雲南に封じられたが、そのうち軍閥として独立国の様相を呈してきた。広東、福建も同様であり康熙帝は彼らが強大になるのをおそれ、

これら地域を圧迫していった。これに対して三桂などは反抗して大乱となったが、約9年かけて鎮圧されたのである。（三藩の乱＝1673年～81年）三桂は混乱の中1678年に亡くなった。66年の波乱の生涯であった。

ここで今回の美女の登場である。この呉三桂の側室になったのが、明代末期の南京の美妓・陳円円（1623年～1695年）である。出身は江蘇省の常州市、太湖に面した無錫市の北西に位置する街で

ある。彼女の生涯は、たかだか400年前の人であるが何故か多くの伝説に包まれて事実か否か不明のことが多いが、おそれず書き進めて行きたい。

円円は歌謡に長じた絶世の美女と言われ、多くの男性の心を奪ったようであるが呉三桂もその一人である。常州に生まれた彼女が南京の花柳界にデビューした経緯は、次の二つに集約される。一つは明末の崇禎帝の皇后・周氏の父の周奎が皇帝のために金で集めた美女の一人というもの。

もう一つは崇禎帝の妃の一人である田氏の父・田弘遇が南京で遊んだ際に八百金で買ったとも言われる。彼女は母を早くに亡くしており花柳界に身を投じざるを得なかったのであろう。

ところで、彼女は「秦淮八艶」の一人である。南京市内に秦淮河が流れている。この河の中流域にL字形に曲がって流れるところがあるが、そのあたりに孔子廟などがある「夫子廟」という有名な



陳圓圓像《清史図典・順治朝》
（ウキペディアより）

観光地がある。それに隣接して、明代に科挙の試験のための中国歴史上最大の試験会場である「江南貢院」があり、2万人超の受験生に対応できる建物があった。そして河を挟んで反対側に今は無き社交場が殷賑を極めていた。中国では他では見られない景観である。秦淮八艷はこの地で活躍したのである。科挙の受験生は進士に合格して名妓と遊ぶ時が来るのをきっと夢想したのではなかろうか。秦淮八艷とは明末清初にこの繁華街で活躍した民族の気骨に溢れた多芸多才の名妓8人をいう。南京は昔の名前を金陵と呼んだので、金陵八艷ともいう。残りの7人も美女なので紹介しておきたい。括弧内は出身地である。この中で陳円円と共に有名なのが李香君（1624年～1654年）であり、後述したい。佳人薄命と言われるが、陳円円を除く7人は皆何故か短命である。

顾黄波（南京）、董小宛（蘇州）、卞玉京（南京）、李香君（蘇州）、寇白門（南京）、马湘兰（南京）、柳如是（嘉興）

もう一度1644年に戻りたい。李自成は北京を陥落させ、大順皇帝を名乗った。この時李自成軍により陳円円は捕らえられてしまった。一方首都を救うべく北京に急行していた呉三桂は北京の陥落を知り、進軍を止め山海関に戻ってしまう。李自成は呉三桂に対してしきりに降伏を勧めたので順軍への投降に傾いていたが、陳円円が捕虜となつたとの報を聞くと激怒した。そして山海関を開いて清軍に降り反転して李自成への攻撃を開始するに至った。呉三桂はいつもは山海関周辺にいたはずであるが、いつ頃どのようなきっかけで陳円円を知ったのか定かではない。ともかく激闘の末李自成軍を打ち破り円円を探し出させ、ついに自らの手に取り戻したのである。

前述のように李自成を破り平定に功績のあった呉三桂は清朝から藩王として雲南に封じられた。

そのため陳円円を正妃に迎えようとしたが、彼女は固辞して受けなかったのである。出自を気にしたのであろうか。三桂は仕方なく別の女性を娶ったが、この女性が嫉妬深い性格であったため、円円は可哀そうに王宮の外の別院で一人で暮らしたという。そして三桂が三藩の乱を起こすと、三桂の下を辞して女道士となり余生をすごしたらしい。実は北京落城の際、陳円円は行方不明となりその後死亡したとする説も有る。

雲南省の昆明市にある大和宮という道観の庭の池の中程に彼女の像があるそうだ。機会があれば是非見てみたいものだ。

最後に秦淮八艷の中のもう一人の有名な妓女である、李香君を紹介したい。

〈李香君〉

1624年蘇州の生まれ。秦淮八艷の一人。父は朝廷の武官であったが、宦官の魏忠賢ぎ ちゆうけんなるものに罪に問われ家は没落した。こうした家庭環境からか美しいこともあり妓楼に住むことになった。彼女の生涯は、清の孔尚任こうしょうにんの著した戯曲「桃花扇」に詳しい。彼女をヒロインとして描き、史実に基づいて書かれているためこれにより伺い知ることができる。「桃花扇」という題名でテレビドラマとなり評判を呼び、また舞台でも「李香君」として何度も演じられた。この戯曲は、李香君と恋人の侯方域こうほういきの悲恋物語である。彼女がある人物の妾にされそうになり、引き受けに来たものと争いとなり血まみれとなって気絶する。彼女が侯方域からもらい片時も放さなかった美しい扇に血が滴ったが、友人が血を花に見立てて枝葉など加え桃花が咲いたように美しく描き上げたことからこの名が付いた。戯曲は1643年から1645年の明王朝の滅亡を背景に、復社（明末の文学・政治団体）の侯方域と妓女・李香君の悲恋を物語としたものである。最後は二人は連れ添うことができず、それぞれ出家するという結末を迎えるのである。

河南省をめぐる友好提携都市(つづき)

文と写真=村上直樹

前回(5月号)で、開封市の菊祭りに出展された孫文の生家を紹介した。4月に、偶々神戸に行く機会があったので、兵庫県立舞子公園内にある「孫文記念館」を覗いてみた。この施設はもともと、孫文の支持者であった神戸華僑界の大立者、呉錦堂の別荘「松海別荘」に併設されていた楼閣「移情閣」を使用している。1984年11月にそれまで管理していた神戸華僑総会から寄贈を受けた兵庫県が記念館として一般公開した(当時の名称は「孫中山記念館」)。その後、明石海峡大橋の建設に伴い解体されたが、2000年には現在の場所に復元され、2005年10月に「孫文記念館」と改称されて現在に至っている。なお、「孫文記念館」については『わんりい』2020年6月号でも和田宏氏が紹介されている。

建物(移情閣)自体、国の重要文化財に指定されている記念館内には、孫文の功績、日本・神戸との関わり、実業家・呉錦堂の活躍ぶりなどを示す、記念品、調度品、額などが展示されており、映像による紹介もわかり易かった。孫文と日本の関わりでは、何と言っても、1924年11月28日に第一神戸高等女学校で開かれた講演会が知られている。この講演で孫文は東洋の王道と西洋の覇道を対比し、いわゆる「大アジア主義」を提唱した。実際この講演が開催された女学校があったのは、現在の兵庫県庁第1号館の場所である。私も、この日、行って見たが(最寄り駅はJR「元町」)、写真のように庁舎の外の壁にこの講演を記念する標識と簡単な説明があった。

今回も、まず標識からかなり遠ざかってしまった。



兵庫県庁第1号館にて(2022年4月)

孫文が主導した民国初期のさまざまな出来事における河南省(中原)の役回りについては、もう少し調べて、この「雑感」でも取り上げたいと思っている(帝政復古を目指した袁世凱が河南省項城市の出身であることは2021年1月号で触れた)。

さて、日本と河南省の間の友好都市関係であるが、今回は一覧表(1月号)の12番目、大阪府柏原市と河南省新郷市から始める。新郷市は昨年3月号の「雑感」で触れたように、周の武王が商(殷)の紂王を破り、商を滅ぼした「牧野之戦」があった場所として知られる。一般財団法人・自治体国際化協会(クレア)の「提携情報」によると、両市提携のきっかけになったのは、1984年8月に柏原市の少年少女合唱団が訪中公演を行ったことである。この時に、新郷市で演奏会が開かれたかどうかはわからなかったが、合唱団の評判が中国各地に広まり、それが新郷市との提携に繋がったそうである。提携の契機としては④市民交流によるもの、に当てはまる(契機の分類は3月号を参照してほしい)。

つづく2件は、いずれも河南省側が洛陽市である。洛陽市とは福島県須賀川市も友好関係を結んでいるが、その契機が牡丹の花であったのに対して(4月号)、ここでは2件とも③歴史的なつながり、を契機とする。まず、奈良県橿原市^{かしはら}の場合は、藤原京の時代に遣唐使が洛陽を訪れたことが縁で民間交流が始まった。その後「ロマントピア藤原京'95」に洛陽市長を招聘して行政レベルの交流も進み、2006年2月11日に友好都市関係締結が実現した。契機としては③に加えて④市民交流によるもの、も当てはまりそうである。

ここで「ロマントピア藤原京'95」とは、1995年の3月29日から5月21日まで、藤原京^{けんりつ}の建立1300年を記念して、同市の藤原京跡を主要会場に開催された地方博覧会である。その資金源は竹下内閣の下での「ふるさと創生事業」にあった。この事業は、1988年から1989年にかけて、各市区町村に対し地域振興のために1億円を交付した政策であり、正式名称は「自ら考え自ら行う地域づくり事業」と言う。具体的には不明だが、いわゆる「バブル景気」真った

だ中に企画された博覧会は、バブルがはじけ日本経済の様相が一変した後の開催に当たって、さまざまな苦勞があったのではないかと推察される。

次に岡山市についても、「クレア」によると、洛陽市との間には同市出身の吉備真備きびのまきびが遣唐使として2回にわたり洛陽を訪れたことで、古くから縁があった。吉備真備は695年、現在の岡山県倉敷市真備町箭田に生まれ、775年に亡くなった（享年81）、政府高官で学者。第9次遣唐使の留学生として717年に唐に渡り、18年間学んだ後の735年に多くの典籍を携えて無事帰国した。その後、752年には第12次遣唐使節の一員として再び唐に渡り、翌753年に帰国する。

以上、唐の時代に洛陽が中心都市の1つで、遣唐使が訪問したことは間違いないにしても、当時の首都は長安（現在の西安）ではなかったか、洛陽も首都だったことがあるのか？ この疑問に対しては、唐朝は618年に李淵（唐高祖）によって建立され、朱全忠の王権篡奪により907年に滅亡したが、その間904年から907年だけ朱全忠により首都が洛陽に移された、というのが正解のようである。ただし、690年から705年にかけて、武則天（則天武后）が国号を唐から周（武周）と改め、首都を洛陽に定めた一時期がある（逆に長安が陪都）。あらためて、歴史というものは複雑である。

ところで、洛陽と聞くと「水席」料理を思い浮かべる人も多い。一連の料理を指す「水席」という名称には2つの意味が含まれており、1つは温かい料理がすべてスープ（水分）に入っていること、他の1つはさまざまな料理が次々と流水の如く運ばれてくるということ、だそうである。

写真は中でも代表的な「牡丹燕菜」である。2010年5月に老舗「真不同」で撮った。真ん中にある卵のクレープ生地で作られた牡丹が色鮮やかである。主材料は大根の千切りを蒸したもので、酸味と胡椒味の組み合わせだったと記憶している。大根を材料としながら、最高級料理の燕の巣を思わせるので、この名がついたとのこと。

さらに『百度百科』によると、以前は「洛陽燕菜」と呼ばれていたが、1973年10月に、時の周恩来総理がカナダのピエール・トルドー首相（現首相、ジャスティン・トルドーの父親）を伴って「真不同」を訪れた際、牡丹をこよなく愛した周恩来のために、とくに



“牡丹燕菜” 「真不同」にて（2010年5月）

（写真のように）牡丹を飾った上でこの料理を出したところ、周恩来は大いに喜び、「洛陽牡丹甲天下、菜中也能生出牡丹花来」（洛陽の牡丹は天下一、料理の中にも牡丹の花が咲いている）と評したため、その後「牡丹燕菜」とも呼ばれるようになったそうである。周恩来の風雅を示すエピソードでもある。

同じ岡山県にある新見市にいみが友好関係を結んでいるのは河南省信陽市獅河区である。「クレア」の記述によると、両市間の交流のきっかけを作ったのは岡山市で設備会社を経営していた故田口勝三氏である。氏は「戦時中、信陽市近くに駐屯した際、マラリアにかかり道端に倒れていたところを3人の中国青年に助けられ、その恩が忘れられず日中国交回復後、戦友の慰霊を兼ねて信陽市を訪ね」ていた（引用は「クレア」の「提携情報」より）。契機の種類が難しいので、とりあえず⑨その他、としておく。

「クレア」の「提携情報」には、1998年に信陽市の行政機構が大きく変わり、獅河区が出来た、とも書かれている。前回（5月号）触れた行政区域の分類と関連しそうなのでインターネットで確認すると、概ね以下のような経緯であった。1949年の新中国建国以来、当地は信陽専区と呼ばれていたが、1970年に信陽地区と改称され、さらに、1998年6月9日、信陽地区が撤廃されて、新たに信陽市（地級市）、および、その市街地を構成する（県級の）獅河区と平橋区が創設された。

なお、私が信陽市（の市街地）を訪問したのは、2015年8月に開催された第10期豫商大会（年に一度、国内外の河南省出身経営者が集う一大イベント）を参観した際である。会場は平橋区の「信陽市百花之声大劇院」であった。ただ、残念ながら、この時は会議に参加しただけの、とんぼ返りだった。（続く）

中国の面白い神話物語・伝奇物語(15)－李娃伝(中)－

顧 傑

前回の「李娃伝」の続きです。

公子はようやく李娃宅に出入りできるようになり、物語は彼の望む方向へと展開していく。

ある日の夕食後、李娃の母親は新しいろうそくを用意して、独りで散歩に出かけて行った。すると、公子と李娃はすぐに熱烈恋愛中のカップルとして、お互いの愛情を隠さず確かめ合っていた。ろうそくが半分ほどになった頃、公子は、「あなたと出会ってから食事中でも、夢の中でもあなたのことが忘れられなくなりました」と告白をした。すると李娃も同じだと頷いた。

公子は、事情を正直に話し出した。「ここに来たのは、単に部屋を借りたいわけではなく、この一生の願望を実現したいためなのです。この私の願いをかなえて頂けませんか」

と、この時、老婦人が戻ってきた。顔が赤くした李娃を見て尋ねると、公子は自分の話を繰り返した。それを聞いた老婦人は笑いながら、「男女のことです。愛情への欲望は自然なこと。感情が高まったら、たとえ父母が命令しても、止めることは出来なんでしょう。しかし私の娘は醜くて愚か者です。あなたの傍にいる資格などございません」

公子は老婦人の話を聞いて、顔が明るくなり、老婦人に心から感謝をして、「何としても、あなたの御恩に報います！」と言ったので、老婦人はようやく頷いて、公子と李娃の愛情を認めた。

翌日、明るくなってから、公子は荷物を全部運んで来て、李娃の家に住み着くことになった。

それからは、友だちとのつながりを全部断ち、毎日李娃とその仲間の遊び人たちと自堕落な生活

を始めた。

三カ月たった頃には、持ち合わせのお金を全部使い果たしてしまった。公子は父親からもらった宝石、絹など高級品を売って、生活をつづけた。

更に六カ月が過ぎると、高級品を売ったお金も無くなってしまった。公子は家から連れてきた下僕たちを解雇し、自分の高貴な服も売り払って生活費に充てたが、使えるお金はすぐ尽きてしまい、腐った生活も続けられなくなってしまった。

すると老婦人はだんだんと公子に冷たくなり、時々追い出そうとするようになった。

ある日、李娃は遊びに行こうとしていた公子に、「公子よ。私たちはもう一年も一緒に過ごしてきたのに、子供はまだできません。この近くに竹林があり、そこに子供を授けてくれる神様がおられると聞きます」

と聞いて、続けて、「お供え物を準備して頂けませんか？」といった。

公子はそれを聞くと、すぐ残りの服などを整理して、最低限必要なもの以外を売りに出して、

豚、牛、羊や祭酒を買い、李娃と一緒に竹林へ行った。

李娃は信仰深く毎日朝から神の前で祈祷し、公子は竹林の整備など手伝いなどで少し路銀を稼ぎながら、二日間李娃を待った。

三日目、公子たちは戻る途中で、人気の無い道にさしかかると、その奥にひっそりと胡同（フートン）があった。

すると、李娃は公子にこういった。「この奥に、私のおばさんの家があります。せっかく通りかかったのですから、ちょっと訪ねて行っても良いでしょうか？」



「ふれあい中国」写真集より『胡同』(桂林天元国際旅行社)

公子はそれを聞いて頷いた。胡同を百歩も歩くと、車がそのまま通れるような大きな門があった。

李娃の使いが扉を叩くと、扉が開き、中から派手な服を着た女性が応対に出てきた。

「どちら様でしょうか？」女性が尋ねると

「李娃がご挨拶に参りましたと、おばさまに伝えてください」

公子が李娃に目をやると、李娃は軽く笑って、「おばさんの小間使いです。おばさんったら、彼女をずいぶん可愛がっていますね」

公子が門から中を覗くと、大きな池があり、その先はずっと奥へ続く廊下が見えた。

暫くすると、先ほどの女性と一緒に、40代の女性が現れた。

「おやおや、李娃、私のかわいい姪はどこなの？」

「ここにいますよ、おばさま！」

李娃のおばさんは公子たちを門の中へ招き入れ、庭の池の中心にある亭で、珍しい食材を使った豪華な食事を振舞ってくれた。

宴の途中に、公子は李娃におばさんのことを尋ねてみたが、李娃は誤魔化して、答えなかった。

食事後、お茶と果物が用意されたが、どれも公子が今までに見たことないものばかりだった。

暫くすると、門扉を叩く音がして、開けると、李娃の家で見たことのある奉公人が馬で駆け付けて来たところだ。李娃の顔を見ると、顔の汗をぬぐいながら言った。

「李娃さま、早くお戻りください。ご主人様が重病で倒れました！もう意識もはっきりしません。私と一緒に早くお戻りください」

それを聞いた李娃は慌てておばさんに「お母さまは病気のように、私もどうすればよいかはわかりません。私が先に家に戻ります。あとで馬車でおばさまと公子を迎えに参ります」

公子が李娃と一緒に戻ろうとすると、おばさんは怒り出して、

「公子よ！李娃のお母さんは亡くなりそうなのですよ。葬式の準備を私と一緒に考えて李娃を手伝わなくてはいけないのに、李娃と一緒に帰るなど、何を考えているのですか！」

と叱った。

公子は仕方なく、おばさんと一緒に葬式の場所

や費用を考えた。太陽が沈み、鳥たちも巣に戻る頃になったが、迎えの馬車はまだ来ていなかった。どうしたのか心配する公子に、おばさんが言った。「なぜこんなに遅いのだろう。公子よ、先に戻って状況を見てもらえませんか。私は用意を整えて後から行きますから」

公子は自らロバを借りて李娃の家に戻ったが、その門扉は鎖で封じられていた。公子は驚いて隣の人に訊くと、その隣人は答えた。

「そもそもここは李家が借りていた部屋です。期間が来たので、二日前に解約しましたよ」

「どこに引っ越ししたのか分かりますか？」

と訊いたが、隣人も知らないようだった。

公子は李娃のおばさんの家に戻ろうとしたが、もう夜も遅くなり、恐らくたどり着かないだろうと思い、身に着けている服を脱いで、一晩の宿賃をひねり出した。

翌日、憤慨しながら公子はおばさんの家に行つて、門扉を叩くと役人風の人が出て来た。

公子はその役人に訊いた。

「李娃のおばさんはどこにいますか？」

「おばさん？おはさんとは何だ、何のことを言っているのだ」と役人は応えた。

「嘘をつかないでください！」と公子は言う。

「昨夜はここにいたんです。なぜ隠すんですか！」と怒りながら話をすると、聞いた相手は事情が呑み込めたように答えた。

「ここは崔という、皇帝が信頼し、尊敬している役人の家です。昨日は、ここの庭を借りて親戚を接待したいという人がいたので、一時貸してやっただけですよ。夜になる前に引き上げましたよ。」

公子はそれを聞いて、最近の怪しい出来事が数々思い出されて、心の中に怒りがふつふつと湧き上がってきたが、これからどうするかの見途も立たないまま、町中をさ迷い歩くのだった。

こんな様子の公子を見て、親切な人が食事を与えてくれたが、公子は三日間、何も喉を通らなかった。心に怒りを抱きながら、何も食べなかったせいか、公子は重い病気に罹ってしまった。

すべてを無くした上に病気になってしまった公子は、これからどうなるのだろうか。

この話は来月に続くのでお楽しみに！

「秦皇島」をご存知ですか？……(15)

文と写真 吉光 清

ひと昔（ふた昔？）前の海外渡航の際には、餞別を渡され、帰国前の空港の免税店で、お返しの高級酒や外国産タバコを買ったり、周囲に配る菓子類をたくさん買い込んだりしたものだったが、海外旅行が身近になり、ネット通販で何でも（？）手に入る時代になってしまい、そんな風習はすっかり廃れてしまった感がある。出発前にお土産品をメニューから選び、先方への配送を予約出来るサービスなどは最早、便利というより興醒めに近い。

そこで、お土産は現地ではしか入手できないようなものを、という気持ちで物色するが、食い意地の張った筆者といえども、生ものは持ち帰ることが出来ないで、やはり、小物、雑貨の他はおつまみとお酒ということになってしまう。国内旅行でもお土産と自分へのご褒美は、地酒が“鉄板”である。

ということで、結局、帰国前に購入した頻度と数が多かったのは、秦皇島市特産の「秦皇夢」という「白酒 (bai jiu)」だった。

筆者は晩酌用に青色のガラス瓶に入った「秦皇夢」を買っていたが、お土産用に買ったのは、アルコール度数が 42 度、容量が 200ml の陶製容器入りであった。この陶器が気に入った。その形は右の写真の通りである。

■陶器の形は青銅器の「銅爵」!!

ご覧のように 3 本の脚があり、右上部に飲み口がある（写真の容器には、実際の飲み口は付いていない）。小さな写真の方は 250ml 入りの金属製のスキットルであるが、アルコール度数は 62 度である。

古代の青銅器の意匠らしい造形を、寡聞にして知らなかったのが、自宅にあった写真集を開いて見た。安徽省の遺跡から出土した古代文物の写真の中に、良く似た形状の酒器があり、「銅爵」という名称であることが分かった。

ウィキペディアによれば、中国が金石併用文化の時代を経て青銅器文化の時代に入ったのは、紀元前 1700 年頃（「夏」または「殷初期」）と考えられているが、甘粛省で発掘された青銅製刀器の年代測定から、紀元前 3000 年には既に青銅器が作られていたこ

とが確かめられている。

青銅器として最も早く登場したのが、酒を温め、飲酒する「爵」という酒器であった。ただし、貴重な金属原料を使い、燃料、労働力、高度な技術を必要としたため、生活用具ではなく、神や先祖を祀る祭器として宗教的機能を持ち、ひいては、所有者の政治的・社会的な役割を象徴するものであった。初期の青銅器は鑄造技術が未熟だったため、殆ど文様が無く、「爵」以外の器種も少なかったが、紀元前 1600 年頃～1300 年頃になると、器種、文様も多彩になり、大型の複雑な青銅器が作られたという。しかし、春秋時代から戦国時代に移行するあたりで、鉄製品が武器として重要な位置を占め、鉄器文化へと代わり、他の金属に代えることが難しかった「銅鏡」などの製品を除き、青銅器製造は廃れたという。

■始皇帝が銅爵で飲んだ酒は？

戦国時代を終わらせた始皇帝も、各種の青銅器とともに神酒や収穫物を祭壇に供え、祭祀終了後の宴席では「銅爵」で飲酒したことであろう。

その当時の酒はどのようなものだったのだろうか？ 現在の白酒であった筈はない。

『史記』には「夏王朝の君主であった『杜康』が高梁酒（「濁り酒」ではなく「澄んだ酒」）を作り始めた」と記述があり、そこから、「杜康」は「酒神」、「酒造業の開祖」とされた（百度百科）。現在も河南省の「杜康酒」にその名を残すが、高粱酒そのものが「杜康」と呼ばれたことも知られている。

ウィキペディアによれば、南方から伝わった蒸留法で、強い酒が製造されるようになったのは宋代以降である。したがって、始





爵を持って描かれた杜康(百度より)

皇帝が飲んだ酒も、三国時代の英雄たちや「詩仙」と称えられた「李白」の飲んだ酒も未だ醸造酒であり、高いアルコール度数ではなかったことになる。

「漢詩の会」の植田先生が「李白が飲んでいた酒の度数はビール程度のものでしょう」と仰言

るのを聞いて合点したものである。

中国各地で作られる白酒は、恐らく材料や工程が少しずつ異なると考えられるが、高いアルコール度数と無色透明で香り高いという共通性を持っている。そのため、中国東北部、山東省、四川省などでは「白乾児」、揚州では「辣酒」、成都では「乾酒」と呼ばれるらしい。

一方で、醸造した酒を蒸留しないで熟成させると、「紹興酒」を代表とする茶褐色の酒になるので、「黄酒(huang jiu)」と表現されるのも至って分り易い。

■「南戴河医院」近くのショッピングセンター

お土産用の「秦皇夢」を買っていたスーパーは、22路のバスが戴河大街を右折して寧海道に入って最初のバス停「南戴河医院」を降りた先にあった。

ただし、入り口は寧海道を右折して直ぐのところであり、寧海道には面していない。「社区医院」として、地域住民に公衆衛生と一次的な医療を提供する病院で、高度な医療を提供するのは、他の国営病院や軍の病院に任せられているようである。病院前の通りには药店や菜館が多く並んでいるようだった。

肝心のスーパーは「艾欣生活购物广场(地上1階と地下のみの建物)」の地下にあった。入り口の付近は駐輪スペースになっていたが、単車や自転車であらゆる状態のことが多く、自転車で食料品を買い出しに行った時には、割り込んで駐車するのに苦労した。

地上部分の売り場と、地下には広い生鮮食料品、パン、総菜などの売り場(スーパー)、他にも、土産品、各種酒類、日常雑貨、衣料品、化粧品、時計や装身具なども販売されていたので、全体としては、ショッピングセンターだということになる。

地下には緩い傾斜のエスカレーターで往復するようになっていた。ここで何回か買い物をする中で、2つほど「これはどういうことだ?→ナルホド!」という体験をしたので報告させていただきたい。



分厚い布製の防寒扉の例

■ショッピングセンターでの2つの「ナルホド」

建物のドアは営業中には開放されて、代わりに丈の長い分厚いビニールが暖簾のように下がっていて、それを掻き分けて中に入るようになっていた。自動ドアより効率的に客が出入りできる。

初めて、食料品売り場を利用した時のことである。エスカレーターを降りた少し先にカウンターがあり、2人の従業員が待ち構えていて、何か話しかけて来た。「言葉が分からない」と身振りで示したが、通してくれそうもない。ザックを背負っていたのだが、「それを渡せ」という雰囲気だった。予期しないことで戸惑っているところに、後から客が来て手提げを従業員に渡したら、青い布袋の中に封印されて客に返された。つまり、自分の手提げ等(ザックも)をそのままでは店内に持ち込めないのだ。店の買い物カゴに青い袋と商品を入れてレジに並び、精算を終えると、係員が専用の器具で封印を外してくれるので、そこで自分の手提げ等を買った物を詰め込むことになる。店内の監視が全く不要になり(ナルホド①)、万引きを完全に防止できるシステムであった。

暖房が始まる時期になってから買い物に行き、いつもと違うことに気づいた。ビニールの暖簾ではなく、上の写真のような、床まで届く分厚い布製の扉に替わっていて、真ん中を左右に分けて出入りするのである。防寒対策として、寒気を遮断し、人の出入りの際の暖気流出を最小限に抑えようとする、電力も不要な省エネシステム(ナルホド②)だった。

他の施設でも見たので、北京での生活が長かった方にお尋ねしたら、「北京より北にある寒冷地では普通に見られますよ」とのことだった。(続く)

●参考資料

新中国出土文物: 外文出版社、中国国際書店、1972.

「東西の峻厳な二人の革命家」(1)

和田 宏

〈聖なる軍人・クロムウェル〉

『私のクロムウェル像』

ロンドンのウェストミンスター宮殿（国会議事堂）の正門には、オリヴァー・クロムウェル（Oliver Cromwell 1599～1658）の銅像が立っている。右手に握った剣を杖のように地面に立て、左手で聖書を太股の上に押さえる様にして持っている。少しも意気軒昂ではなく、うつむきかげんのむしろ憂いを含んだ表情である。

クロムウェルは、国王軍と議会軍が対立した清教徒革命（ピューリタン革命）で、議会軍を指揮して国王軍を破り、国王チャールズ1世（1600～1649）を公開処刑し、スコットランドを併合し、アイルランドに乗り込んで旧教徒など無辜の市民を大勢虐殺した。国王に替わってイングランド共和国の『護国卿』（Lord Protector）になった事実上の独裁者でもあった。死後2年余り経ち、王制復古となるや、クロムウェルの遺体が墓から掘り出されて斬首された。

クロムウェルを専制暴君の圧政から国民を解放した“希代の英雄”と称賛する声もあれば、“国王殺しの偽善者”と罵倒する声もあり、彼ほど毀誉褒貶の激しい人はいない。自らを“神の道具として”と謙遜し、“神のみ心”をこの世に具現化するために心血をそそいで奮闘したクロムウェルには、他人には言えない苦悩があったのではないだろうか。この銅像は、アイルランドの自治を疎ましく思う当時の首相ローズベリによって1895年に私費で建てられたものだ。私は軍服姿の銅像の写真を見ただけであるが、純潔真摯な意志と人間的悲しみを持ったクロムウェルに惹きつけられる。

『イングランド国教会の創設』

清教徒革命より凡そ100年前、ヘンリー8世による宗教改革が行われた。ヘンリー8世は、後継ぎ（男児）を産めない王妃キャサリン・オブ・アラゴンと離婚し、愛人アン・ブーリンと再婚しようとしたものの、ローマ教皇クレメンズ7世がこれ



オリヴァー・クロムウェル像(ゲーゲルより)

を認めなかったため怒って教会と手を切り、1534年「国王至上法」を公布して「イングランド国教会」を作り、自らその首長に座った。

当時ヨーロッパでは、ローマ教皇に逆らうなんて事は以ての外だった。だからヘンリー8世の補佐役で、敬虔なローマン・カソリック信者の大法官トマス・モアは、“教皇の言う通りにした方が良いですよ。”と助言した。しかしヘンリー8世の怒りを買うのが落ちで1535年、モアは斬首された。

『ユートピア』の著者でもある偉大なヒューマニストは、チューダー朝専制君主ヘンリー8世の犠牲となった。モアは、断頭台に登りながら刑吏に向かって、“私の首は短いから、ちゃんと狙いをつけて下さいよ、さもないと不名誉ですよ。”と言い、膝をついて頭を台に乗せ、いよいよ斬首される直前に、こう付け加えた。“ちょっと待って下さい。髭をきちんと揃えさせて下さい。髭は一度だって私に反逆したことはないんですから。”と言って、首を伸ばして断頭台の露と消えた。このおどけた言葉は、モアを“社会主義の先駆者”と位置付けたソ連のイーゴリー・オシノフスキー教授の著わした伝記の中に書かれており、和田の作り話ではない（笑）。

モアの首はロンドン橋に晒された。毎日父親の首を目にしながら橋を渡っていた長女マーガレットが、後にその首を引き取った。今はカンタベリ



清水書院新書版「クロムウェル」(今井宏著)所載

一大聖堂の納骨所に収められているので、皆さんご安心を。

ヘンリー8世の宗教改革には、もう一つ、財政的な動機があった。イギリスの富の3分の1を押さえていた当時の教会の財産を奪い取ろうとして、修道院の解体に乗り出した。ヘンリー8世の意を汲んで修道院や教会財産の解体に辣腕をふるったのが、側近のトマス・クロムウェルである。教会の解体は進んだが、ヘンリー8世の目論見は外れ、没収した教会財産は大半が地方の郷紳（ジェントリー）層の手に流れてしまった。

そのお陰で地方の大地主であり、名望家としてのジェントリーが力をつけた。トマスの口添えでハンティントンの尼僧修道院の土地など莫大な財産を手に入れたのがトマスの甥っ子で、オリヴァ・クロムウェルの曾祖父である。オリヴァ・クロムウェルもまた、この時勃興したジェントリーの典型的な人物である。

この半近代的ブルジョワ層は、法律家や医師といった専門知識人や商工業で富を蓄えた都市の富裕層と利益を同じくしながら、恣意的に増税したり兵役を課したりする絶対王制に対抗するようになって行く。

ヘンリー8世は、6度結婚し、アン・ブーリンを含む2人の妻を処刑している。アンには世継ぎになれない女兒（=のちのエリザベス1世）を産んだと因縁を付け、姦通罪を着せて1536年に斬首。1540年には右腕だったトマス・クロムウェルにさえ反逆罪を被せて斬首。処刑した貴族、役人、友人、聖職者は数知れない。嗚呼～！ヘンリー8世

ほどとんでもない男を、私はいまだ見聞きしたことがない。

『宗教改革』

ドイツ人の神学者マルティン・ルターは、1517年、『95か条の論題』を教会の門に張り出し、“免罪符を買えば、罪が許され天国に近くなるというカソリック教会の神父たちの教えは、おかしい！”と、ローマ教皇レオ10世を頂点とする腐敗した旧教に異議を申し立て（プロテスト）し、宗教改革の火ぶたを切った。

続いてフランス人のジャン・カルヴァンが1536年、スイスのバーゼルで、『キリスト教綱要』を刊行し、宗教改革を推し進めた。“その人が天国に行けるか行けないかは、あらかじめ決まっている”というカルヴァンの『予定説』を読んだ市民は、天国に行く人は一生懸命に働く人に違いないと考え、労働を美德とする文化が育まれた。

マックス・ヴェーバーが書いた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』によれば、カルヴァン派のプロテスタント達の努力と勤勉さが富の蓄積をもたらし、ヨーロッパを資本主義経済社会に導いたとしている。ルター、カルヴァンと続いた宗教改革は、神の前に全ての人間が平等であるという意識と個人の自立とを促し、現代に繋がる民主主義思想の発展に大きな役割を果たした。

宗教改革で個人に目覚めた人々によって市民革命が起こされた。史上初のその市民革命が1642年のイギリスの清教徒革命であり、最大のものが1789年のフランス大革命である。

清教徒革命は、不徹底だった宗教改革の深化と台頭して来たブルジョワ層による専制政治への反抗という2つの要素から見れば、理解し易いのではないだろうか。

オリヴァ・クロムウェルは、カルヴァンの信条を模範とし、より峻厳な規律を主張してイギリス国教会内から分かれて行ったピューリタンの一人である。ピューリタンと言えば、1620年、ピルグリム・ファーザーズと呼ばれるピューリタン102人が、ジェームズ1世の弾圧から逃れ、信仰の自由を求めてメイフラワー号で北アメリカ大陸マサチューセッツ州プリマスに渡っている。

天安門の石の獅子

訳：一瀬靖子／大槻一枝

北京の天安門は、知らぬ者のない偉大な建築物である。天安門の歴史、建築についてはもちろん、門前金水橋の南にある二つの石の獅子について、なぜ獅子の腹面に鉄砲で傷つけたような深い溝が刻まれているのかにも、興味深い話がある。

それは闖王 — 李自成が北京に入城した時のことであった。李闖王の農民軍は陝西延安を出発し、破竹の勢いで1644年3月19日北京城を陥落させた。この時、明朝最後の皇帝が、景山のアカシアの木で首をくくって自殺した。城を守っていた役人は皆太監(宦官)で、李闖王の大軍が城下に迫るとすぐ城門(当時の広安門)を開いた。李闖王は広安門を入ると前門(正陽門)に進んだ。前門を守っていた大將は李国禎で、城の明け渡しを拒んで、双方は対戦したが、李闖王の大軍には勝てないと知って独り逃げ去った。城を守っていた明兵らは、当然城門を開いて李闖王を迎え入れた。李闖王は先頭に立って前門に向かった。市街を抜けて“大明門”(各王朝で呼び名が異なり、民国時代以降、中華門と呼ばれる。現在門の北に人民英雄記念塔が立っている)に進むと、遠くに五つの通用口がある高大な牌楼が見えた。丞相の牛金星が李闖王に告げた。

「御覧なさい、これが明朝の“承天門”(1651年に天安門と改称。牌楼は取り壊され、現在の形になる)です。民百姓を苦しめた“聖旨(皇帝の命令)”はここから出ていたのです」

李闖王は、憎い明朝の皇帝と聞くと、直ちに強い弓に強い矢をつがえて馬を走らせた。馬が門に近づき、“承天之門”という四字がはっきり見えるところまで来ると、李闖王は弓を引き搾り、

「皇帝の座を返還せよ！」

と叫んで力いっぱい矢を射た。矢は承天之門の天の字に突き刺さった。蜂起軍の将兵から万歳の声上がり、明の兵隊はみな肝をつぶした。

闖王は強い弓矢を肩に、承天門に近づいてみた。承天門牌楼の南側に二つの華表と二匹の白玉石で作られた獅子が置かれている。門の北側にも同じ材質の獅子がいる。華表はさておき、四匹の大きな獅子は実によく出来ている。東側の二匹は右足の爪を繡球(刺繍を施した毬)にかけ、頭をやや東に傾けながら、

目は西の方を見ている。西側の二匹は左の足を獅子にかけ、東の獅子と対をなし、それぞれが注意深く通行人を注視している。

李闖王が丞相、将軍らと共に歩いて行くと、突然兵士の大声が聞こえて来た。

「闖王！ご用心！獅子が動いています！」

「馬鹿なことを！石の獅子が動くか？」

と言いつつも闖王は、獅子のかげに怪しい動きを察知していた。彼は言いながら銃を構え、馬を引いて東側の獅子を打とうと構えた。ドーンという音と共に、火花が散り、獅子の腹に弾の跡ができた。同時に西側の獅子の後ろを走り去る人影が目に入った。兵士がまた叫ぶ。

「闖王！敵です！ご用心を！」

言われるまでもなく、闖王は獅子の爪の下から、明朝の将兵がうごめいているのを見ていた。彼は素知らぬ顔で将兵を手招きし、自分は鉄砲を抱えて西側の獅子に対峙していた。この時将兵らは、早くも西の獅子を取り囲み、明朝の大將李国禎を逮捕した。獅子の腹の傷にはこんな事実があった。

そして、こうして明朝は滅んだ。(文＝金受申)

~~~~~

**李自成**：中国明末の農民蜂起軍指導者。李自成の乱と呼ばれる。蜂起して首都北京を陥落させ明を亡ぼした。順王朝を興し皇帝を称したが、すぐ清に滅ぼされた。本名：李鴻基。陝西省の人。1606年生れ。



華表



牌楼



## 「沉鱼落雁」と「羞花闭月」

後藤 芳昭

毎号、有為楠さんの「寺子屋・四字成語」雑感を楽しみにしています。

5月号の雑感には、「沉鱼落雁」がテーマでした。

「沉鱼」は西施を、「落雁」は王昭君をあらわす美称として由来の説明がありました。

誌面の都合上、「羞花闭月」に対応する美人の名前が省略されていたのでここに補足させていただきます。

「羞花」は楊貴妃、「闭月」は貂蟬です。

都合あわせてこの4人が中国の四大美人と言われています。

中国の美人の話となれば、「わんりい」寺西代表の登場です。

「わんりい」2020年9月号の「中国の歴史を彩る美人百花(2) 中国古代四大美女」に、この4人についての時代背景や特徴など分かりやすく紹介されています。

これを機に他の中国の美人百花シリーズを再読し、梅雨寒の日々に心を温めるのも宜しいのではないのでしょうか？

≠≠≠≠≠≠≠≠≠≠≠≠≠≠≠≠

◎日中友好会館よりのご案内です

### 日中国交正常化 50 周年記念展 Part II

「～北京国際美術ビエンナーレより～」

アートで見る中国のいま

2022 年は、日中国交正常化 50 周年の記念すべき年です。日中友好会館美術館では、50 周年記念として 3 つの展覧会を企画しました。

今回はその第 2 弾で、“世界最大規模の絵画と彫刻を主とする国際美術ビエンナーレ”と称される「北京国際美術ビエンナーレ」の出典作品から、厳選した絵画・版画・彫刻・映像など 35 点を展示します。

現代アーティストの作品を通じて「中国のいま」を感じてください。展示作品は全て日本初公開、若手アーティストから著名アーティストまでを網羅しています。

### 開催日時：

2022 年 6 月 17 日（金）～8 月 14 日（日）

10：00～17：00

6/24・7/8・7/22・8/5 は 20：00 まで開館

開催場所：日中友好会館美術館

### ●関連イベント

#### ①砂絵アートパフォーマンスと古箏演奏

日時：6 月 25 日（土）①11:00～11：40

②14:00～14：40

出演：謝雪梅（古箏）・蔡曉華（砂絵）

場所：日中友好会館 B1F・大ホール

座席：先着 80 名/回、立ち見 OK、参加無料

#### ②二胡と琵琶のサマーコンサート

日時：7 月 16 日（土）・7 月 17 日（日）

①11：00～11：40 ②14：00～14：40

出演：桐子（二胡）・さくら（琵琶）

場所：日中友好会館 B1F・大ホール

座席：先着 80 名/回、立ち見 OK、参加無料

#### ③中国茶 de 納涼茶会

日時：7/23（土）、7/24（日）①11：00～12：00

②13：30～14：30 ③15：30～16：30

講師：安田薫子（中国政府公認高級茶芸師）

場所：日中友好会館 B1F・第一会議室

定員：6 名/回 参加費 500 円

#### ④美術館コラボめし

展覧会期中、油条とお粥のセットがいただけます。

美術館向かいの中華レストラン「馥」で。

### ●上記展覧会のご案内に関するお問合せは：

公益財団法人日中友好会館 文化事業部

03-3815-5085 URL:<https://jcfcmuseum.jp/>

### ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

淋しさや一尺消えて行く螢

（立花北枝）

yuè hēi gū jì yè  
月 黒 孤 寂 夜

liú guāng yī chǐ yíng  
流 光 一 尺 螢

## 【わんりいの催し】

皆様のご参加を歓迎します

### ♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館
- 日時：6月7日(火) 10:00~11:30  
視聴覚室  
7月19日(火) 10:00~11:30  
美術工芸室
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：1,500円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

❀❀ 中国語で読む 漢詩の会 ❀❀

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：6月26日(日)10:00~11:30
7月24日(日)10:00~11:30
- 講師：植田渥雄先生
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)
Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp
(有為楠)



■6月・7月定例会 代表宅

- ▼6月9日(木)13:45~
- ▼7月7日(木)13:45~

■'わんりい' 発送 三輪センター

- ▼7月号:7月1日(土) 10:00~
- ▼8月は休刊

☆☆ 編集後記 ☆☆

6月の初めには、24節気の芒種^{ぼうしゅ}になります。芒とは、稲の穂先の針のような部分を言い、「のぎ」と読みます。穀物を表す字の偏に多い「禾」を「のぎへん」と言う所以です。

芒種とは、「穀類の種を蒔く時期」という意味です。長い間に、農業技術の発達や、種苗の改良、それに気候の変化などの影響で、各地の農作業は変化しています。

日本の田園では、この時期、田に水が引き込まれ、青々とした苗が植え付けられて、景色が一変します。場所によっては、畑の麦が実りの時を迎え、美しい黄金色の絨毯が広がっています。

これからが穀物の実りを楽しむ時期なのに、世界の食糧倉庫を自認するウクライナの麦畑が戦火にさらされています。トウモロコシの植え付けが出来ないでいます。これからの世界の食糧事情が心配です。

~~~~~

'わんりい' は、新入会をいつでも歓迎します

年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年度会費1000円。

■問合せ：044-986-4195 (寺西)

### 'わんりい' 274号の主な目次

|                          |    |
|--------------------------|----|
| 寺子屋:四字成語 (53)『得過且過』      | 2  |
| 「日译诗词」(23)散曲[天净沙]秋思      | 3  |
| 「漢詩の会報告」(58)李白『早に白帝城を発す』 | 4  |
| 美人百花 (13)「陳円円」           | 6  |
| 「中原」雑感(22)河南省を回る友好提携都市   | 8  |
| 中国の面白い神話伝奇物語(15)『李娃伝』(中) | 10 |
| 「秦皇島」を御存知ですか(15)         | 12 |
| 「東西の峻厳な二人の革命家」(1)        | 14 |
| 「天安門の石の獅子」               | 16 |
| みんなの広場                   | 17 |
| 'わんりい' の催し・お知らせ          | 18 |